

## [道 徳]

## 道徳的実践力を高めるための授業展開

- 絵本とモラルスキルトレーニングを活用した学習指導の有効性 -

星野 裕樹\*

## 1 主題設定の理由

道徳の時間における資料の取り扱いについて、小学校学習指導要領解説道徳編（2008）には、「道徳の時間の目標の達成を図り、児童に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが大切である。」と書かれている。

「心に響く資料」に関して、押谷（2000）は、「心に響く資料といったときに、さまざまなものが考えられるが、教師自身にとっても心に響く資料であり、心を込めて扱うことができるような資料が求められる。その最たるものは、教師自身が創る自作資料である。」と述べている。このことから道徳の時間の学習指導において、児童の心に響く自作資料を活用することは、道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養う上で、大きな意味があるだろう。

また、「多様な資料の開発と効果的な活用」という側面からみると、道徳の時間の資料に関して田沼（2007）は、「シンプルな言葉と絵で表現された絵本の多くには人間としての望ましさや生きる希望、生きる勇気が含まれ、『ことば』を介して伝えられる良質な生き方モデルの親から子へ、大人から子どもへと継承させる道徳陶冶性を含んでいます。」と絵本のもつ道徳資料としての効果について述べている。それでは、絵本という資料をどう授業の中で効果的に活用するのか。このことに関して、大江（2002）は「道徳授業に魅力的な要素が多く含まれた絵本を用いれば、子どもも授業に魅力を感じるはずです。」と述べ、先行実践を紹介している。大江（2002）は、その中で「絵本を終末段階で用いる場合」と「中心資料で用いる場合」の2つの活用方法を示している。このモデルをもとにして、絵本を効果的に活用した学習指導をすることは、「道徳的心情・判断力・実践意欲と態度」を養う上で効果的であると考えた。

さらに、高まった「道徳的心情・判断力・実践意欲と態度」を「道徳的実践力」につなげるためには、絵本の世界から現実世界に場面を変え、実生活における人との関わり方を学ぶ段階を設けることが必要であると考えられる。林（2008）は、「道徳の時間には正しい答えが出せるのに、実際の場面では具体的な行動の仕方がわからず、道徳的な行動のできない子どもたちがいる。彼らには、具体的な行動の仕方をスキルとして教えることが必要である。」と述べている。実際に、道徳の時間には望ましい考え方をする児童が、それを行動に表すことが難しいという学級の実態があった。そこで、林（2008）の提唱するモラルスキルトレーニングの手法を用いた学習指導を取り入れ、人との関わり方についてのスキルを身に付けさせることが、「道徳的実践力」を高めると考えた。

絵本、そしてモラルスキルトレーニングを活用した学習指導は、個々ではその有効性が実践で証明されている。しかし、絵本を用いた学習指導で十分に「道徳的心情・判断力・実践意欲と態度」を高めることができれば、児童は強い必要感をもって次時のスキルトレーニングに取り組むことができ、結果として「道徳実践力」は、より高まるのではないかと考えた。

## 2 研究の目的

道徳的実践力を高めるためには、絵本を活用した学習指導とモラルスキルトレーニングを取り入れた学習指導を関連付けて授業展開することが有効であることを明らかにする。

\* 燕市立吉田北小学校

### 3 研究の内容と方法

本研究の内容は、道徳の時間の内容項目4-(5)「家族愛」に関わる授業展開において、絵本とモラルスキルトレーニングを活用した道徳の時間の教材研究と実践の考察である。

県内の公立小学校の5年生の1クラス(男14名 女20名 合計34名)に対して、以下のように計画し、平成21年9月に授業実践を行った。

- (1) 内容項目に関わる学習指導計画を作る。本実践に年間35時間のうち、2時間を割り当てる。
- (2) 実態把握のために、内容項目に関わるアンケートを行う。
- (3) 道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための学習指導を行う。道徳陶冶性の高い絵本を中心資料として用いることで、家族へ感謝の気持ちを伝えようとする気持ちを高める。
- (4) 人との関わり方についてのスキルを学ぶ学習指導を行う。自作資料をもとにした役割演技を通して、家族への感謝の気持ちを言葉や行動で表す方法を身に付ける。
- (5) 家庭での実践化を図る。

### 4 実践の概要及び結果

#### (1) 内容項目に関わる学習指導計画の作成

他の重点化して指導する内容項目との関連から、内容項目4-(5)家族愛は2時間を割り当て、学習指導を展開する。2時間のうち1時間を道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための学習指導とし、もう1時間を人との関わり方についてのスキルを学ぶ学習指導とする。以下に学習指導計画を示す。

##### ① 道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための学習指導

9月1週	主題名	いつもありがとう	内容項目	4-(5)
ねらい	普段、ともに生活している家族に、感謝の気持ちを表そうとする心情を養う。			
資料	・絵本「だいじょうぶ だいじょうぶ」著 いとうひろし(講談社) ・ワークシート	備考	絵本「だいじょうぶ だいじょうぶ」を中心段階の資料として活用する。 スキャナーで絵本の全ページをパソコンに取り込み、プロジェクターで投影する。	
主題構成の理由	家族のつながりの希薄化が言われる昨今、改めて家族に敬愛の念をもって生きることが必要である。「おじいちゃん」と「ぼく」の心のつながりを理解させることで、自分も家族に感謝の気持ちを表そうとする心情を養う。			
主な発問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで一番うれしかった家族の言葉や行動は何ですか。</li> <li>・「おじいちゃん」の励ましで「ぼく」ができるようになったことは何ですか。</li> <li>◎「ぼく」は感謝の気持ちを「おじいちゃん」にどう伝えたいと思いますか。</li> <li>★あなたは、家族に感謝の気持ちを言葉や行動で表していますか。</li> </ul>			
◎は中心となる発問 ★は「特に自覚を深める発問」				

##### ② 人との関わり方についてのスキルを学ぶ学習指導

9月2週	主題名	ありがとうを伝えよう。	内容項目	4-(5)
ねらい	家族に対する感謝の気持ちを表すための実践力を高める。			
資料	・自作資料① ・自作資料② ・ワークシート	備考	自作資料をもとに役割演技をすることを通して、家族に感謝の気持ちを伝えるためのスキルを学ばせる。(モラルスキルトレーニング)	
主題構成の理由	家族に対する感謝の気持ちを言葉や行動でどのように表せばよいのかを考え、互いに考えを交流させることで、家庭における実践力を養う。			
主な発問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「わたし」はなぜドキドキしているのでしょうか。</li> <li>・「わたし」はどうしたいのでしょうか。</li> <li>◎あなたならどうしますか。「わたし」になって演技しましょう。</li> <li>★あなたならどうしますか。「ぼく」になって演技しましょう。</li> </ul>			
◎は中心となる発問 ★は「特に自覚を深める発問」				

## (2) 実態把握のため、内容項目に関わるアンケートの実施

授業実施前に「家族」についてのアンケートを行った。結果は次のとおりであった。

①あなたは家族にかんしゃの気持ちをもっていますか。

・もっている (29人) ・ときどきもつ (5人) ・もっていない (0人)

②どんな時に感謝の気持ちもちますか。

・ごはんを食べるとき時 ・毎日 ・ひまな時 ・欲しい物を買ってくれた時

③あなたは家族に感謝の気持ちを伝えようと思いますか。

・伝えようと思う (11人) ・伝えようと思わない (23人)

④家族がなかよくすごすためには、どうすればよいでしょうか。

・手伝いをする ・会話をする ・一緒に～する ・けんかをしない

アンケート結果から多くの児童は家族に対して感謝の気持ちをもって日々接していることが分かった。しかし、一方で感謝の気持ちを家族に伝えることに抵抗のある児童が多いことも分かった。つまり、家族は大切なものであるし、仲良くしなければいけないが、感謝の気持ちを伝えることは難しいと多くの児童が思っているのである。

また、アンケートの質問項目②と④で気になる回答があることは明白である。質問項目②の「欲しい物を買ってくれた時」は、家庭生活の中における家族の有り難さに目を向けさせる必要があるだろう。また、質問項目④の「けんかをしない」は最低限のルールなのだろうが、消極的な要因でもある。家族の大切さに気付かせ、もう一歩深く考えさせる必要があるだろう。

以上のことを踏まえ、今後の学習指導において次の3つの点に配慮しながら授業を展開していこうと考えた。

- ・普段の生活の中における家族の有り難さに気付かせ、感謝の気持ちを持たせること。
- ・視点を「自分」から「家族(大人)」に移行し、子どもの行動が大人の心を動かすことに気付かせること。
- ・「けんかをしなければ、仲が良い」という固定概念を改めさせること。

## (3) 道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための学習指導

絵本「だいじょうぶ だいじょうぶ」を中心資料として取り扱う学習指導を行った。まず、初めに「今日は、家族に感謝の気持ちを伝える勉強をしましょう。」と学習課題を子どもたちに伝えた。その後、子どもたちに「家族に感謝の気持ちを持っている人がたくさんいることが分かってとてもうれしくなりました。ところで、みんなは、どんな時に感謝の気持ちを持つのですか。」と聞いた。子どもたちは「風邪をひいて看病してくれた時」や「習い事の送り迎えをしてくれる時」などの意見を発表した。

次に「感謝の気持ちを家族に伝えている人はいますか。」と聞き、挙手させた。結果は「伝えている」が15人、「伝えていない」が19人であった。そこで、「これから、一冊の絵本を見ましょう。絵本には『ほく』と『おじいちゃん』が出てきます。『ほく』は『おじいちゃん』に感謝の気持ちを伝えています。どうやって伝えているのか考えながら読みましょう。」と話した。ちなみに、絵本の全ページはスキャナーでパソコンに取り込んでおき、当日はプロジェクターで投影した。絵本の主な内容は次のとおりである。

小さいころの「ほく」と「おじいちゃん」は近所によく散歩をしていた。散歩をしていると新しい発見とともに世の中のこわさも見えてくる。心配する「ほく」に「おじいちゃん」は「だいじょうぶ だいじょうぶ」と声をかけてくれた。①「だいじょうぶ だいじょうぶ」と声をかけてくれたおかげで、心配しなくても大抵のことはどうにかなるし、おおきくなったらできるようになれると「ほく」は思うことができるようになる。

大きくなった「ほく」は、花屋さんと花を買い、ある建物に向かう。そこには、病室のベッドで横になる「おじいちゃん」がいて、「ほく」は何度でもあの言葉を「おじいちゃん」にかけ続けると心に誓う。「だいじょうぶ だいじょうぶ。だいじょうぶだよ。おじいちゃん。」② ※下線 ①②は発問として取り扱った。

絵本を読み進める中で2つの発問を投げかけた。1つ目は「心配する『ほく』を『おじいちゃん』はどうやって助けたのでしょうか。」である。「危険から体を張って守った。」「いつも一緒にいる。」「『どうしたの。』と聞く」などの意見が出た。次のページを読むと、おじいちゃんは「だいじょうぶ だいじょうぶ」とほくを励ましていることが分かる。普段の生活の中における何気ない一言ととらえがちであるが、「ほく」にとってこの言葉がどれだけ大切なものであったかを考えさせるために「この『だいじょうぶ だいじょうぶ』という言葉で『ほく』はどう変わっていくのか。」に気を付けながら読みましょう。」と付け加えた。もう一つの発問は「病室のドアを開けたとき、『ほく』は

『おじいちゃん』にどんな言葉をかけたでしょう。」である。目をつむらせ、ほくの行動をイメージさせた後、隣同士で役割演技をさせた。全体の様子を見ながら、望ましい行動を役割演技の中で取り入れているペアを見つけおき、指名して演技させ、行動モデルを示していく。「おじいちゃんの近くで話したところがよい。」「やさしく語りかけていたところがよい。」など、褒めながら右のような行動モデルが出来上がった。出来上がった行動モデルに従ってもう一度、役割演技をさせた。その後、「ほく」から「おじいちゃん」に視点を変更させるために、「おじいちゃん」の気持ちを聞いた。「お見舞いに来てくれてうれしい。」「元気づけてくれて安心した。」などの意見が出た。最後に「感謝の気持ちを相手に伝えることは、人と人を強く結びつけていくのですね。家族も例外ではありません。」と話して授業を終えた。

望ましい行動モデル

①近くで話すこと

②やさしく語ること

③目を見ること

#### (4) 道徳的実践力を高めるための学習指導

前時の学習で、祖父を初めとした家族に感謝の気持ちを伝えようとする心情が高まっていると感じた。そこで、本時では、家族に感謝の気持ちを伝える力を身に付けさせる授業を行うことにした。学習指導計画にしたがって、本時ではモラルスキルトレーニングを取り入れることにした。年度当初から、たびたび道徳の時間で役割演技とアイスブレイキングのための活動を取り入れてきたので、児童には役割演技の抵抗は少なかった。

今日、道徳の時間に家族について勉強した。担任の先生が「今日、家に帰ったら、いつもお世話になっている家族にかんしゃの気持ちをつたえましょうね。」とおっしゃった。

わたしは、お父さんに「いつもありがとう。」と言おうと思った。

わたしのお父さんは仕事にいっしょうけんめいで、毎日、夜遅くに帰ってくる。おこるときはすごくこわいけど、休みの日なんかは一緒に遊んでくれるから、わたしはお父さんが大好きだ。でも、「いつもありがとう。」なんて言ったことないから、うまく言えるか心配だった。

「ただいま。」いつもの時間にお父さんが帰ってきた。お父さんは夕ごはんを食べるとテレビを見始めた。

わたしは、ドキドキしながらお父さんの前に立った。

自作資料①

授業構成は、まず、自作資料①の登場人物「わたし」になって、お父さんに感謝の気持ちを伝える場面の役割演技をさせ、必要なスキルを確認する。この資料は、家族に対して感謝の気持ちはもっているのだが、なかなか実践に移せない児童がいるという学級の実態を考慮して作成した。

次に自作資料②の登場人物「ほく」になって必要なスキルに着目させながら役割演技をさせ、一般化を図り、実践力を高める。この資料は、対象をお父さんだけでなく、家族全体に広げるために作成した。

初めに「家族に感謝の気持ちを言葉や行動で伝えている人はおよそ半数でした。でも、ほとんどの人が感謝の気持ちをもって、『伝えよう』と思っているのです。今日は、家族に感謝の気持ちを伝える方法を勉強します。」と話した。

まず、子どもたちに自作資料①を読んで聞かせた。そして、「『わたし』はどうしてドキドキしているのですか。」と問い、児童に自分の考えをワークシートに書かせた。その後、モラルスキルトレーニングの手法を取り入れ、「ペアインタビュー」をさせた。

まず、2人組をつくる。今回は隣の席同士をペアにした。2人のうち、1人がインタビュアー、もう1人は「わたし」になる。インタビュアーが「どうしてドキドキしているのですか。」と聞き、「わたし」が答える。役を交代してもう一度、同じ手順を繰り返す。ペアインタビューの後に発表させたところ、次のような考えが挙がった。

- ・言ったことがなくて恥ずかしいから
- ・お父さんがなんて言うか心配だから
- ・どう話しかけたらいいかわからないから

発表の後、「きっとみんなが考えた理由で「わたし」もドキドキしているんでしょうね。」と児童に話した。

今度は事前の記述は取り入れずにペアインタビューを行った。インタビュアーの質問は「あなたはどうしたいのですか。」である。同じようにペアインタビュー後、考えを発表させたところ、次のような考えが挙がった。

- ・「ありがとう」って言いたいです。
- ・感謝の気持ちを伝えたいです。

次にモラルスキルトレーニングの手法であるモデリングを行った。前時で確認した望ましい行動モデルを示した。「あなたならどうしますか。どう行動するのか、モデルをもとに考えましょう。」と話し、お父さん役とわたし役で役割演技をすることを伝えた。役割演技をさせる前に、2つの約束事を確認した。1つはバカにしたりからかったりしないこと、「よーい。スタート」のかけ声で役割演技が始まり、次に2人で拍手をして役割演技を終えることであ



る。その場に立たせて役割演技を行い、役を代えてもう一度行わせた。この時に、望ましい行動モデルに沿った演技をしているペアを抽出しておく。その場での演技が終わったら、抽出しておいたペアを指名して全員の前で演技させた。この時に「相手の目を見て言っていたことが素晴らしい。」と演技したペアを褒め、黒板に「相手の目を見て話す。」と板書する。同じようにして望ましい行動モデルを黒板に書き足していく。黒板に書かれた望ましい行動モデルを指で差しながら読みあげ、「こういったことが大切なのですね。」と話した。

## 望ましい行動モデル

- ①近くで話す。
- ②相手の目を見て話す。
- ③笑顔で言う。

自主学习 日記 9月4日

今日は9月4日金曜日、今は午後9時くらい。今日は、ぼくの家族を先生に紹介します。

僕の家族は5人家族。お父さんは今、ソファで横になってテレビを見ています。「疲れた〜。」が口癖です。

お母さんは夕食の片付けをしています。「洗たくものもしなくちゃ」といつも忙しそうです。

おじいちゃんとおばあちゃんはねる準備をしています。2人とも立ったり座ったりするのが大変そうです。

ちなみに、ぼくは今まで自分の部屋でゲームをしていました。ぼくはゲームが大好きです。

日記を書いていて思ったんだけど、最近みんなで話したり、笑ったりすることが少ないです。ぼくは少しさみしい気持ちになりました。

自作資料②

次に用いた資料は自作資料②である。この資料は、一見不満のない家族の中にある「ぼく」のさびしさの原因に気づかせ、前時で確認した望ましい行動モデルを生かして温かい家族の絆を構築する力を身に付けさせるために作成した。

「さみしい原因は何だろうね。」と問いかけると、児童からは「会話がないうこと」「助け合いの様子がないうこと」などが原因として挙げられた。その後、「家族がみんなニコニコいい笑顔になるために、『ぼく』になって行動しよう。」と話した。役割演技では次のような行動が多く見られた。

「ぼく」と「おとうさん」では、「おつかれさま〜」と一言かけて肩もみや肩たたきをする様子が見られた。

「ぼく」と「お母さん」では、「お母さん、たまには休んでよ。」と声をかけ、夕食の手伝いをしたり、洗濯をしたりする児童が多かった。

「ぼく」と「おじいちゃん・おばあちゃん」では、代わりに布団をしいてあげる子や寝る前に肩たたきをする児童の様子が多く見られた。

役割演技が終わった後に、「今日は、家族に感謝の気持ちを伝えるための勉強をしました。言葉や行動で『ありが

とう』の気持ちを伝えることは大切なことですね。」と話した。

## 5 考察

ここでは、絵本を活用して高めた道徳的心情・判断力・実践意欲を、モラルスキルトレーニングを取り入れた学習指導を行うことで、道徳的实践力が高まったかを考察する。

### (1) 道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための学習指導

授業後に児童が記述したワークシートの項目「家族に感謝の気持ちを伝えようと思いますか。」では、34人中33人の児童が「伝えようと思う。」と回答した。授業前に実施したアンケートの質問項目③では34人中11人であったことから考えると22人の児童が「伝えようと思わない」から「伝えようと思う」に考えが変わった。この結果から、この学習指導を通して児童の道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うことが概ねできたと考える。この時間を確保したことは、次時のスキルトレーニングに、より強い必要感をもって臨むことにつながったと思われる。実際に次時のスキルトレーニングでは、感謝の気持ちを伝えるには、どんな言葉を使って、どう行動しようか真剣に考え、演技する様子が見られた。

また、同アンケートの項目「授業を終えての感想」では、「自分は、おじいちゃんに何もしてあげていないので、『いつもありがとう』と伝えようと思います。」や「ぼくが、おじいちゃんに『だいじょうぶ だいじょうぶ』と言っていたところが感動した。」などの感想が出た。このことから、児童の実態と学習内容に合った絵本は、児童の心情に響きやすいものであることが分かった。今回、用いた「だいじょうぶ だいじょうぶ」もその中の一つで、道徳的陶冶性が非常に高い絵本であることを感じた。

道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うことは、道徳の時間においては欠くことはできない。スキルトレーニングの前段階に道徳的心情・判断力・実践意欲と態度を養うための時間を位置づけることは、スキルトレーニングを

より有効に機能させることが分かった。

## (2) 道徳的实践力を高めるための学習指導

自作資料①と自作資料②を資料として取り上げた。自作資料①は、普段なかなか言えない「いつもありがとう」という言葉をお父さんに伝える場面である。お父さんの前に立った「わたし」の気持ちに共感する児童が多く、その後の役割演技を行う際の意欲を高めることができた。実際に、役割演技をみんなの前でやりたいと手を挙げるペアが多く、どのペアも「わたし」と「お父さん」の立場に立ち、真剣に考えて演技することができた。自作資料②は自作資料①で学習した望ましい行動モデルを、お父さん以外の家族に適用できることを体験するためのものであり、家庭における実践力の高まりをねらって作成した。多くの児童がすでに要領を得た様子で、次々に役割演技を行った。実践後、「家族に『いつもありがとう』の気持ちを伝えましょう。」と児童に話し、その様子を絵日記に書いてくることを課題とした。記述の一部を以下に示す。

- ・初めは緊張したけど、「いつもありがとう」と言ってみました。お父さんも「ありがとう」と言ってくれて、いい気持ちになりました。
- ・少し恥ずかしかったけど、お母さんに「ありがとう」と言ったら、「うれしいよ」と言って笑ってくれたので、うれしい気持ちになりました。
- ・お母さんが料理を作っているときに「いつもありがとう」と言いました。「どうしたの？急に」と言われたけど、最後にお母さんも「ありがとう」と言ってくれて、うれしかったです。
- ・「ありがとう」と言う前にお母さんにカレーを作ってあげました。カレーを出したらお母さんが「ありがとう」と言ってくれて、うれしかったです。

絵日記の記述から、自分で考えてお手伝いなどの行動で感謝の気持ちを伝えている児童が多いことが分かった。言葉で伝えるのは恥ずかしいようであるが、しっかりと行動に表すことができたようである。

高まった心情や判断力を実践につなげるためには、今回取り上げたモラルスキルトレーニングのようにスキルを体験させて身に付けさせる段階を設けることは非常に有効であることが分かった。「家族は大切にしよう。」で終わっていたら、児童の絵日記に書かれていたような行動が各々の家庭において実践されることは無かつただろう。実際に児童の絵日記に書かれている行動は、そのほとんどが役割演技で行われたものである。絵日記の「自分」と「家族」が実にいい笑顔で描かれていたことから児童の道徳的実践力の高まりが感じられた。

## 6 今後の課題

絵本は文字数が少ない分、そこに描かれている絵や登場人物の言葉が自分の心に染み渡ってくるような感覚を覚える。登場人物の立場をとらえさせたり、登場人物の気持ちに寄り添わせたりする上では、道徳の時間の資料として非常に有効であると感じた。そこで、今回、資料として活用した「だいじょうぶ だいじょうぶ」のような心に響く絵本を見つけ、活用していこうと思う。また、モラルスキルトレーニングは、児童の実態に合わせて実践力を高めることができるという点で優れており、正確に学級の実態を把握した上で、今後も取り入れていくことが道徳的実践力を高めることにつながる。

今回の授業実践では、モラルスキルトレーニングの前に絵本を用いた学習指導を取り入れた。ここでの実践意欲の高まりは次時のモラルスキルトレーニングに確実につながっていたと考える。今後も児童の実践意欲の高めることを第一に考えながら、道徳的実践力につながる指導方法を模索していこうと思う。

## 引用参考文献

- いとうひろし だいじょうぶ だいじょうぶ 講談社 1995年  
 大江浩光 絵本を使った道徳授業 明治図書 2002年  
 押谷由夫 道徳教育 ミネルヴァ書房 1993年  
 生き生き「道徳の時間」 東京書籍 2000年  
 田沼茂紀 <http://blog.livedoor.jp/stanuma55/archives/50618472.html> 2007年  
 林 泰成 モラルスキルトレーニングプログラム 明治図書 2008年  
 文部省 小学校学習指導要領解説道徳編 2008年8月